

令和6年度病害虫発生予察特殊報 第1号

令和6年5月24日
岐阜県

- 1 害虫名 トマトキバガ *Tuta absoluta* (Meyrick)
- 2 確認地域 岐阜・西濃地域
- 3 作物名 トマト

4 発生状況

令和6年4月、県内の一部のトマト施設栽培ほ場において、トマト葉および果実にせん孔侵入した食害が認められた。食害部にはトマトキバガと疑われる幼虫が確認された。また、施設内では、暗色で細長いガの成虫が確認された。当該ほ場から成虫を採取し、病害虫防除所で同定を行った結果、トマトキバガであることが確認された。

本虫については、令和5年度にフェロモントラップ調査において県内での発生を確認し発生予察特殊報（令和5年10月11日付け）を発表したが、農作物での食害は初確認で、農作物における食害は、熊本県、宮崎県（ともに令和3年度）、北海道（令和5年度）で発生予察特殊報が発表されている。

5 形態及び生態

（1）形態

成虫は、翅を閉じた静止時で体長5～7mm（前翅長約5mm、開張約10mm）。前翅は灰褐色の地色に黒色斑が散在する。後翅は一様に淡黒褐色である（写真1）。幼虫は、終齢で約8mm、体色は淡緑色～淡赤白色。頭部は淡褐色。前胸の背面後方に細い黒色横帯がある（写真2）。

（2）生態

1年に複数の世代が発生し、繁殖力が高い。卵～成虫になるまでの期間は24～38日程度で、気温が低い時期はさらに延びる。成虫は夜行性で、日中は葉の間に隠れていることが多い。主な寄主植物はトマト、ナス、パレイショなどナス科植物で、インゲンマメも寄主植物として確認されている。雌は一生のうちに平均で約260個の卵を寄主植物の葉の裏面などに産み付ける。

6 被害

トマトでは、茎葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、孔道が形成される。食害部分は表面のみを残して薄皮状になり、白～褐変した外観となる（写真3）。果実では、幼虫がせん孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に数mm程度のせん孔痕が生じるとともに食害部分の腐敗が生じ果実品質が著しく低下する（写真4）。

7 防除対策

- （1）ほ場内をよく見回り、見つけ次第捕殺する。
- （2）発生を拡大させないため、薬剤散布を行うとともに、被害葉や被害果はほ場に放置

せず、速やかに土中深く埋めるか、ビニル袋に入れて一定期間密封し成幼虫を死滅させるなど、適切に処分する。

- (3) 令和6年5月23日現在、トマトキバガに対してはトマトおよびミニトマトで農薬登録されている(表)。なお、農薬散布にあたっては、最新の農薬登録情報を確認し、薬剤抵抗性の発達を防ぐため系統が異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(農林水産省「農薬登録情報提供システム」<https://pesticide.maff.go.jp/>)



写真1 トマトキバガ成虫



写真2 トマトキバガ幼虫



写真3 トマト葉の食痕



写真4 トマト果実の食痕

表 トマトキバガに登録がある薬剤（令和6年5月23日現在）

農薬の種類名	農薬の名称	登録作物名		RACコード
		トマト	ミニトマト	
B T水和剤	エスマルクDF	○	○	11A
アバメクチン乳剤	アグリメック	○	×	6
インドキサカルブ水和剤	トルネードエースDF	○	×	22A
エマメクチン安息香酸塩乳剤	アフーム乳剤	○	○	6
クロルフェナピル水和剤	コテツフロアブル	○	○	13
シアントラニリプロール水和剤	ペリマークSC	○	○	28
	ベネビアOD	○	○	
シアントラニリプロール粒剤	プリロツソ粒剤	○	○	
	プリロツソ粒剤オメガ	○	○	
スピネトラム水和剤	ディアナSC	○	○	5
	ラディアントSC	○	○	
テトラニリプロール水和剤	ヨーバルフロアブル	○	○	28
ピリダリル水和剤	プレオフロアブル	○	○	UN
フルキサメタミド乳剤	グレーシア乳剤	○	○	30
フルベンジアミド水和剤	フェニックス顆粒水和剤	○	○	28
メタフルミゾン水和剤	アクセルフロアブル	○	○	22B
脂肪酸グリセリド・スピノサド水和剤	ダブルシューターSE	○	○	5